

女神様も恋をする

目次

女神様も恋をする

5

番外編 桜井社長は愛妻家

259

女神様も恋をする

お砂糖菓子のような女の子を夢見ていた。
 小さい時に思い描いた理想の自分。
 可愛くて、ふわふわで、皆が愛さずにはいられないような。
 涙を流せば、可哀想にと誰もが手を差し伸べ、守らずにはいられないような。
 そんなお姫様みたいな女性になれるんだって、信じていた。

——今思えば、何を根拠にそんなことを信じていられたのかしら。

藤井麗華はぼんやりとそんなことを考える。

ドライマティーニが美しく注がれた縁の薄いグラスを、優雅な手つきで呷れば、ベルモットの味が口の中に広がった。

隣では後輩の女子が、小鹿のような大きな目にうつすらと涙を浮かべて、一生懸命にしゃべっている。

「不安なんです。彼が私の身体だけが目当てなんじゃないかって……」

麗華は呻き声を上げたくなるのを柔和な微笑の下に押し隠す。そして目の前の壮年のバーテナーをちらりと盗み見た。

いくらバーテナーが黒子的存在とはいえ、男性が目の前にいる事実は変わらない。それなのにこどもも赤裸々にこの類の話をしてしまう心理を、正直に言えば理解しかねる。頭が固くて申し訳ない。

こんなことを気にしてしまうのは、麗華と後輩との間にあるジェネレーションギャップだけが原因ではない。そもそも麗華と彼女は三歳しか違わないのだから。

思い当たる主な原因からあえて目を逸らし、麗華は上品にグラスを置くと、柔らかな微笑をたたくて小首を傾げる。緩やかなカーブを描く長い黒髪が、白いシャツから覗く鎖骨の上で揺れた。

「そうねえ。彼はいくつなの？」

麗華の少し困ったような、けれど慈愛に満ちた聖母のような微笑みに、後輩はうつとりとした顔で答える。

「に、二十六歳です」

後輩の答えに、麗華がふ、と吐息で笑みを零す。

その薔薇色の唇から滑り落ちた笑みは、嘲笑うようなものではなく、相手を安堵させる温かいものだ。間近で見た後輩はなぜかポツと頬を染めた。

「若いのね。それなら求めるのも仕方ないかもしれないわ。大丈夫、好きな女の子が目前にいて手を出さずにはいられないってだけよ。心配しないで」

麗華の声は、女性にしては少し低めの落ち着いたアルトだ。どうやらこの声は聞く人に安堵感を与えるらしい。囁き声の助言に、後輩はパツと表情を明るくした。

「そっか……そうですね。ありがとうございますございます、麗華先輩！ 私なんか気持ちが悪くなりませんでした。やっぱり『麗華様』は頼りになります。先輩大好き！」

感極まったように言って、後輩は麗華の手をぎゅっと握る。

自分よりも一回りは小さい、きれいにネイルアートが施されたその手を見つめながら、麗華は口許を更に緩める。

「ふふ、私も大好きよ」

その言葉に偽りは無い。

可愛くて、ふわふわしたお砂糖菓子のような女の子は、大好きだ。觀賞するだけで幸せな気分になれるから。

だが、それはいくら憧れても自分がそうならないと気付いてからだだった。

麗華は少し切ない気分になって、己のそんな憧憬に苦笑する。

片や後輩は酒も入ってテンションが高くなってきたのか、両手を胸で組み、目を閉じてうっとりと言出す。

「ああーん、麗華様ったら、ほんつとうに凛々しくて、麗しい……！ 思い出します。先輩が合気道の全国大会で優勝したあの時の雄姿を！ カッコ良かったあ。もうもう、先輩はいつまでも私の理想です。ナイトです！」

「あ、ありがとう……」

「ああああっ、もう、どうして、どうして先輩は男じゃないの!? 先輩が男だったら、絶対、ぜえつたい、彼女にしてみらったのに！」

どうやらかなり酔っていたらしい後輩は、叫びながら抱き付き、麗華の胸に頬擦りをしている。

これが取引先のオッサンだったら憤慨するが、庇護欲のそそられる華奢な女の子相手なら話は別だ。

「可愛い」

心に思ったままに感想を述べて、茶色に染められた髪をヨシヨシと撫でてやる。すると後輩は、麗華の胸に突っ伏したまま「かつこよすぎる……！」と叫びて何やら悶絶した。

言動がどこかおかしいのはともかくとして、彼女は本当に可愛い。

まさにお姫様といった感じの愛らしさだ。

——わたしには、ないもの。

麗華はこっそりと諦めの溜息を吐いた。

お姫様になれるだなんてお粗末な夢を見ていたのは三、四歳くらいだったろう。

だが、麗華の自己評価である『お姫様』と現実とは、天と地ほどの差があった。

なぜなら、麗華は『王子様』に見られていたのだから。

麗華の父親は、若い時には『和製ゲイリー・クーパー』と呼ばれていたそうだ。日本人離れた彫りの深い端正な顔立ちをしていて、その年代の人の割に上背もある。

そんな父親そっくりに生まれた麗華は、幼い頃から身体が大きく、キリッとしたイケメン顔。おかげでおまごことでの役割は『お父さん』か『王子様』で、憧れた『お姫様』役が巡ってきたことなど一度もない。

幼稚園から高校まで一貫の名門女子校に入れられたことも、要因のひとつかもしれない。女子ばかりの閉鎖的な空間で、中性的な麗華は恰好の憧れの的となったのだ。

中学生の頃には、後輩からは『麗お姉様』、同級生や上級生からは『麗様』と呼ばれ、ファンクラブができるほどのスターぶりを発揮していた。

周囲の期待に無意識で応えてしまうという、麗華の性格も災いした。『お姉様』と呼ばれると、笑顔で手を振るなどのファンサービスをやつてのけてしまうのだ。これではファンの熱が冷めるはずもない。

高校生になる頃には、麗華自身、『王子様』としての自分に慣れ切ってしまった。

少女達から、甘酸っぱい眼差しで見つめられることも、黄色い悲鳴を上げられることも、日常茶飯事。違和感など全く感じなくなっていた。

こうして形成された麗華の『お姉様』根性は、高校時代のイギリス留学でも発揮された。そして帰国し、日本の大学に入学した後も合気道に傾倒したことで、王子様な上、腕っぷしも強い武道女子となってしまうのである。

無駄な力を使わず効率良く相手を制する合気道は、麗華の性に合っていたのだ。かなり厳しい練習がある部活だったにもかかわらず、楽しんで四年間を過ごした。

この後輩は、合気道に夢中だったその頃に出会った子だ。

彼女は同じ大学の三年後輩で、当時のミスキャンパス。彼女がしつこいナンパに困っていた時、合気道を使って相手を追い払ってやったことがあったのだ。

以来、すっかり麗華に懐いた彼女は、卒業後も麗華を追って同じ会社に就職してしまった。もっとも麗華は総合職、彼女は一般職での採用で、所属する部署は違うため、そうそう頻繁に会うわけではない。

それでも今日のように相談があると言われれば、一緒に呑んだりするくらいには面倒を見ているのだ。

「麗華先輩、今日はありがとうございました！」

可愛らしく挨拶をする後輩と改札口で別れた後、麗華はホームで電車を待ちながら、そつと溜息を吐いた。

「可愛かったなあ……」

甘えるようにすり寄ってきた後輩の感触を思い出す。

柔らかくて、甘い匂いがして、小動物を愛でていた時のような幸せな気分になった。

見ているだけで幸せになれる——それがきつと、麗華がなりたかった『お姫様』だ。

自分もなれると信じていたもの。

「ほんつと、正反対……」

自分に下される評価は、『漢気がある』や『男前』、『潔い』といった、男性に向けた褒め言葉が

ほとんどだった。

男性よりも漢気のある女子には、彼氏なんぞできない。

そう、『男前女子』街道を慕進してきた麗華は、彼氏イナイ歴、二十八年なのだ。勿論、ピッカピカの生娘のままである。

つまり、だ。

本日、麗華を『麗華お姉様』と慕う可愛い後輩ちゃんのお悩み相談の相手として、麗華ほど相応しくない者もいなかったというわけ。

——付き合っている男子が身体目当てかどうか？

「そんなもん、私に分かるわけじゃないでしょおが……」

麗華の情けない吹きは、電車がホームに来るというアナウンスにかき消されたのだった。

2

「おはようございます！」

会社のビルの中に入ると、まず会うのは受付嬢達だ。

麗華が微笑んで挨拶をすれば、彼女達はパツと顔を輝かせて返事をしてくれる。

「お、おはようございます、藤井さん！ 今日のスーツ、すごく素敵です！」

「本当、おニューですね！ お似合いです！ 麗華さんは、何を着ても素敵ですけど」

「ありがとうございます。村田さん、小山内さん。あなた達こそ、今日もとっても可愛いわ」

通りすがりにサラリと返される甘い言葉に、受付嬢達の頬が染まった。

男性が言えば気障過ぎる台詞でも、女性である麗華が言えば、甘くて耳当たりの良い褒め言葉になる。女子校育ちで帰国子女の麗華にとっては、女性を褒めるのはもはや挨拶と言ってもいい。

颯爽と立ち去る、ピンと背筋の伸びたスレンダーな後ろ姿を、受付嬢達がうっとりで見送る。

「ああ……今日も麗華様、フェロモン絶好調……いい匂い……そして美声……。どうやったら、あんなに肌つやつやになるんだらう……毛穴レスなんですけど……」

「手足長い……顔小さい……。八頭身超えとか、同じ人間とは思えない……。あたし、麗華様にだったら抱かれてもいい……」

溜息と共に囁かれる女子達の憧れを、エレベーターの方向へと歩いて行ってしまった麗華が知ることはなかった。

エレベーターでは経理部の男性社員と一緒に立った。

「おはようございます」

「おはようございます」

IDカードを首から下げた彼は、確か入社二年目だ。柔和な感じのイケメンで、お姉様達からの評判がいい。

先に乗り込んでいた彼は、麗華が入って来るのを待っていてくれたようだ。開閉ボタンを押して

いた指を階数ボタンへと移動させ、こちらを見た。

「七階でいいですよね？」

おや、と思い目を上げる。

「ありがたい。……私がこの部署か知っていた？」

七階は営業部と会議室のみで占める階だ。

話したこともない他部署の若手だったので、意外に思つてそう訊ねれば、柔和なイケメンは眉を大きく上げた。

「そりゃあ。この会社で『営業部の女神』を知らない人間は、モグリですよ」

彼の言葉に、麗華は苦笑を漏らす。

自分に付けられたその妙な二つ名の存在は知っていた。

だが、それが好意的な意味だけのものではないことも分かっている。

最初はきつと、若い男性社員達の酒の席で出た戯言だったのだろう。そこから面白がつて社内です使われるようになって、やがて役員達の耳にも入ったのだ。

『ああ、君が例の「女神様」か。なるほど、傾国の美女もかくや。その美貌ならさぞかし仕事もはかどるだろう』

などと、事あるごとに麗華に嘲笑を投げかけたのは、男性優位主義者で有名な、常務の高井戸だった。女である麗華が気に喰わない高井戸は、そう揶揄することで溜飲を下げていたのだろう。

しかしその後、高井戸は倫理委員会より嚴重注意を喰らうことになる。

この会社の倫理委員会は、労働組合と人事部で構成されていたのだが、なぜかこの直後に、外部の専門家が相談役として迎え入れられたのだ。そして、高井戸の麗華に対する発言が明るみとなった。

結果、高井戸は給料の一部を大幅に減額されるという処分が下ったのである。

この高井戸の件のみならず、この会社には男性優位の体質が依然として存在する。お偉いさんの中には、麗華のように上を目指して仕事をする女性を煙たがる人達もいる。その人達にとってこの二つ名は『いい気になっている生意気な小娘』を指しているのだ。

「あらまあ。それは光栄……なのかしら？」

含みを持たせた言い方でニヤリとすれば、彼は少し慌てたように首を横に振った。

「褒め言葉以外の何物でもないですよ！ やめてくださいよ、僕、殺されます！」

その大袈裟な物言いに、麗華は呆れて唇を尖らせた。

「やあね、殺すだなんて物騒な。私はそんなに恐ろしくないわよ」

「そんな、何も藤井さんに殺されるだなんて思っちゃいなくて！ 藤井さんのファンですよ。ホント、怖いんですから」

ブンブンと首を横に振り続ける彼の顔が、心持ち青褪めているのに気付き、麗華はクスクスと笑ってしまった。

この会社で働いて六年目。

入社当時は辛酸も舐めたが、今では周囲から好意的に見てもらえることの方が多くなった。

特に、女性からの支持はかなりあるのではないかという自負がある。

彼が言っているのも、そんな風に麗華を支持してくれる女性社員達のことだろう。

「あら。彼女達、そんなに怖くないわよ。あんなに可愛いのに」

そう言つて微笑んだ時、エレベーターがボン、と音を立てて停まった。

静かにドアが開き、見慣れた七階の光景が見えると、麗華は箱の外へ足を向ける。

「それじゃあ。今日一日、お互いに頑張りましょう」

軽く振り返つて微笑んだ麗華に、若者は少し頬を染めて会釈を返した。

颯爽と歩き出す後ろ姿を見送りながら溜息を吐いた彼の呟きは、麗華には届かない。

「美人な上に営業部の出世頭で、性格もいいとか。ホント、貶すところがない。まさに女神、だよなあ……」

麗華はこの三業不動産において花形と言われる営業部で、主任を任されている。一応、同期の中では出世している部類になるだろう。

今でこそ、厭味半分とはいえ『女神』などと称されるようになった麗華だが、無論最初からこうだったわけではない。

入社当時の麗華はショートカットで、女性にしては大きい百六十七センチの身体をパンツスーツに包み、ほとんど男子と同化してしまっていた。そうしないと、激務をこなせなかったからだ。

だが取引先や上司の中には、女性が男性のように仕事をすることを良しとしない人達が少なから

ずいる。

『女は可愛ければいいんだよ。男みたいになつたつて、男になれるわけじゃなし、女は所詮女なんだから』

などと言われ、それまで麗華が進めていた仕事を他の男性社員に回されたこともあった。

——誰が男になりたいなんて言つた!?

その取引先の男の胸ぐらを掴んで怒鳴つてやりたかつた。

なれるものなら、可愛い女の子になりたかつた。

でも、なれないんだから仕方ないじゃない。

人には定められた器がある。自分の望む形でなかつたとしても、それを受け入れて生きていくしかない。

麗華の器は、残念ながら『お姫様』ではなく『王子様』だったのだ。

そう思い、肩肘を張つてがむしやらに仕事をし続けてきた麗華の心は、ある時ポツキリと折れてしまった。何が原因というわけではない。強いて言えば、小さな挫折の積み重ねだろうか。

『女じゃダメだ』『女にはできない』『可愛げのない』『女なんか』——繰り返し捺される偏見とも呼べる烙印に、麗華の自尊心は少しずつ削られていった。

同時に失われていったのは、いつの間にか育っていた『王子様』としての矜持。

『お姫様』になれないのなら、せめてお姫様を守る『王子様』になろう——それが、麗華なりの、幼い頃の夢の落としどころだったのだ。なのに、それすらも尽きてしまった。

そうして麗華は仕事だけでなく、自分自身にすら意義を見出せなくなってしまった。そんな時、いつも彼女の目標となり、救ってくれたのは、憧れの人だった。

「おはよう、藤井さん」

営業部の自分のデスクに着いた途端、背後から艶のある低音が聞こえてきた。麗華はピクリと肩を震わせてしまう。

この声を、麗華が聞き間違えるわけがない。今まさに、思い返していたその人の声だ。

カアツと顔に血が昇り、ドクドクと心臓が高鳴り出す。しかも発汗までも。彼を前にすれば必ず麗華の身に起きるこの症状は、もはや生理現象になりつつある。

「お、おは、ようございます……さ、桜井、部長……」

いい年をしてしどろもどろになる自分の情けなさに心で涙しつつ、麗華は真っ赤になった顔に微笑みを浮かべて振り返る。

緊張しながらも好きな人を前に自然と笑顔になってしまふのは、恋という病ゆえだろう。

振り返った先には、見るからに仕立ての良さそうなスーツで身を包んだ美丈夫がいた。

桜井辰郎。三十八歳にして営業部の部長まで上り詰めた伝説の男である。そして営業部に籍を置く麗華の上司でもあった。

「いつも早いね」

桜井はモデルのように整った顔を、柔らかに破顔させた。勿論紳士らしく、麗華の動揺には気付いていないと言わんばかりに流してくれる。

「い、いいえ、そんな！ ぶ、部長こそ、お早いですね……！」

「今日はちょっとね。会議が急に入ったから、目を通しておかなきゃいけない資料があつて。そうだ、それで藤井さんに手伝ってもらいたい件があるんだ」

「あ、はい。なんでしょ」

仕事の話になれば、麗華も比較的スムーズに話すことができる。サツと表情を改め、仕事モードに切り替えると、桜井がクスリと笑った。

「部長？」

顔を上げれば、桜井が少し複雑そうな笑みを浮かべてこちらを見ている。穏やかに優しいが、どこかもしかしげな色を帯びているのは、気のせいだろうか。

麗華が不思議に思つて首を小さく傾げれば、桜井はなんでもない、というように首を振った。

「いや。さすがに我らが『女神』は有能だなと思つてね」

「めっ……！ やめてください、部長までそんな」

まさかの二つ名を挙げられ、麗華は恥ずかしいやら情けないやらで、またもや顔を真っ赤にした。そんな彼女に、桜井は肩を竦めて笑う。

「美しく、有能、かつ品行方正。あなたは『女神』の名に相応しいよ。あなたが我が営業部にいてくれて、神に感謝しているくらいだ」

桜井のその言葉を聞いて、麗華の胸に熱いものが込み上げた。

「……っ、ありがとうございます……、桜井部長……！」

誰よりも、この人に褒められるのが、嬉しい。

この人を目標に、麗華は頑張ってきているのだから。

彼は、実は麗華のインターンシップ時代の教育担当者だった。

当時は総務部の人事課長だった桜井は、その年のインターンシップ生をまとめる責任者だったのだ。

初めて彼を見たのは大学三年の時。こんな絵に描いたようなイケメンが本当に存在するんだなと妙に感心したものだ。

男らしく精悍で、かつ甘さもある容貌は、男性でありながら『美しい』と表現しても違和感がない。百八十はある長身に、何かスポーツをやっているような引き締まった身体。その上に乗る頭は驚くほど小さく、仕立ての良い上品なスーツを身にまとう姿は、まるで海外モデルのようだった。

——な、なんでこんなモデルみたいな人がこんなところにいるんだろう……

父親を見て育ったせいでイケメンには多少耐性のある麗華がそう思ったくらいだから、インターンシップ生の女子達からは当然黄色い悲鳴が上がった。

しかしそのミーハーな桜井フィーバーはあつという間に鎮火した。

なぜなら、そのイケメンは紳士ながらも鬼上司だったからだ。

「この土地の活用について、君達からアイデアを出してもらいたい。この課題のために、他の研修はストップするよう担当者と話をつけたので、今日明日の午後をあてて構わない。必要があれば社外に出てもいいが、直帰の際には一報入れてほしい。二日後の金曜までにレジユメを作って提出するように」

ある日インターンシップ生らを集めて、桜井が笑顔でそう言った。

それは会社が投資用物件として実際に所有している郊外の土地らしい。桜井が配布した資料には、その土地の立地条件だけでなく、駅、病院、役所、学校、幼稚園といった周辺環境や人口についても詳しく記載されている。

当然ながらシミュレーション的な課題だろうと、学生らはもらった資料を読み込み、おのおの意見をまとめたレジユメを作成した。

勿論麗華も自分なりに土地の活用方法を考察する。

だが終業後、電車に乗ろうとした際に、ふと思いついて路線を変更した。

その土地を実際に目で見てみたいと思ったのだ。

それに、時刻は十八時を過ぎていたものの、夏場だったこともあり辺りはまだ明るく、このまま帰宅するのが惜しいような気がしたのもある。

そうして辿り着いた件の場所で、麗華はびっくりすることになった。

その住所に、確かに空き地があった。

だが周辺地域の情報が、桜井の資料とは全く違っていたのだ。

桜井の資料ではスーパードットものが病院であったり、集合住宅があるはずの場所が田んぼであったり、という感じだ。

——— どういうこと？

桜井は間違った資料を添付したのだろうか。

——— あの桜井さんが？

そう考えて、麗華は首を横に振った。インターン生として一週間ほど関わっただけだが、桜井がそんなポカをするような人物とは思えなかった。

では、インターン生に対する課題のための架空物件だったということだろうか。

でもそれならなぜ『実際に存在する土地』と言う必要があったのか。

頭の中に疑問符が駆け巡っていたが、とりあえず麗華は周辺の施設を調査しながら、二通りの仮説を組み立てた。

ひとつは、この課題は単なるシミュレーションで、桜井は臨場感を演出するために『実際にある土地』だという言い方をした説。

もうひとつは、何らかの意図があつて、桜井がわざと間違つた情報をインターン生に与えたという説。

考え過ぎかもしれないと思つたが、念のためにと麗華は二パターンのレジユメを提出することにした。

週が明けた月曜日。桜井は会議室に集めたインターン生の前に立ち、レジユメの束をバサリとテーブルの上に置いた。

「君達の提出したレジユメを読ませてもらいました」

ニコリ、と紳士的な笑みを見せ、学生達をぐるりと見回した。ピシリとしたスーツを身にまとつたその姿は、まるで映画のワンシーンのように美しく、女子達の間でホウ、という溜息が漏れる。

その中で麗華だけは、緊張に背筋を伸ばして椅子に座っていた。

「この課題に正解はありません。——— だが、不正解はある。その意味が分かるかな？」

問いかけた途端、桜井の微笑みが消えた。

桜井の語気は決して強くない。だが、いつも穏やかな表情を崩さない彼の鋭い真顔に、インターン生達は一斉に身を竦ませた。

桜井はうん、とおもむろに頷き、ガタリと椅子を引いて自分も腰を下ろす。組まれた脚は驚くほど長く、パイプ椅子の上では窮屈そうに見えた。

「この課題は、この土地をいかに活用するかのアイデアを問うだけのものではない。私はこの課題のために、君達に丸々八時間もの時間を提供した。それだけの時間を費やして得られた結果が『不正解』。正直に言つて、ここまで酷いとは思つていなかった」

失望を隠さない桜井の言葉に、インターン生の中から気の強い者が挙手をした。

「桜井課長。我々のレジユメが『不正解』だと仰る理由をお教えいただけませんか。我々も懸命に課題に取り組みました。理由をお聞きしないと、その評価に納得できかねます」

すると桜井は「いいね」と表情を少しだけ緩めた。

「君のように声を上げてくれる人がいるのはとても喜ばしい。私は指導は一方的であるべきではないと思っているからね」

意見したことに内心ビクビクしていたに違いない。挙手をした学生はあからさまにホッとした表情になる。

「では教えよう。先日私が君達に渡した資料、あれは正しい内容ではなかった。我が社が所有している土地は実在するが、それについての情報……人口や周辺にある施設等はデータラメのものだ。つまりどんなに良いアイデアを考えたとしても、その資料を元になっている限り、それは役に立たないものになるというわけだ。だから、『不正解』なんだよ」

桜井の言葉に、インターン生達が一気にザワついた。

「じゃ、じゃあ、課長は我々にわざと間違った資料を渡したということですか？ なぜそんなことを？」

学生の苛立ったような声色に、桜井はふ、と息を吐き出すように笑った。

「なぜ？ できればそれは自分で考えてほしいところだが……今回は特別に教えよう。——理由はいくつかあるが、まず諸君には自分達が『試される立場』であることを思い出してもらいたい。我が社がインターンシップ制度を導入した理由に、より優秀で意欲的な人材をいち早く確保したいと

いうものがあるのは、事前説明会で聞いているね？」

皆が一様に頷いた。桜井の言う通り、その文言は、インターンシップ制度についてのパンフレットにも、この会社のホームページにも記載されている。

「即ち今我々は、君達が我が社に適応できるか否かを判断しているということだ。もし私の資料に疑問を持ったたり、あるいは実際にこの土地を自分の目で見てみようと考えたりしたならば、『不正解』のレジユメが作成されるはずがないんだ」

桜井は言って、ぼん、と目の前のレジユメの束を労わるように叩いた。

「ここは社会だ。学校という、理論や正当性のみがまかり通る守られた場所ではない。情報の真偽は自ら確かめる慎重さを持たねばならないし、あるいは情報に頼らず己の目で、耳で確かめる行動力と好奇心がなくてはならない。与えられた物だけを受け取り動かない者に、満足のいく仕事などできるわけがない」

言い置き、また立ち上がった桜井に、今度は違う学生が挙手をした。

「……つまり、この課題は『振るい落とし』の一環だったということですか？」

震える声でかけられた問いに、桜井は僅かに首を傾げて見せた。

「この課題の結果が採用の可否に直結しているわけではないよ。君達が我が社を希望するかどうかも分からないだろう。正直なところ、我々が君達学生にする期待はとも低いんだ。勿論君達の現状の能力値は大切だが、我々が期待するのはそのポテンシャルだ。与えられた物を糧に、どう伸びるか、どう増えるか——この課題も、この後君達がどうするかを見るためのものであった、という

ことにしておこう」

含みを持たせて桜井は話を終え、提出された各自のレジュメを返し始めた。一人一人の名が呼ばれ、レジュメを渡され、会議室を出て行く。

最後に残されたのは麗華だ。

手渡されたのは、ふたつのレジュメ。

緊張の面持ちでそれを受け取る麗華に、桜井は訊ねた。

「レジュメをふたつ提出したのは君だけだった」

「……はい」

「ひとつは他の学生と同じように、私の渡した資料に添った内容だった。もうひとつは、全く違う内容のもの。……君は、あの土地に実際に行ってみただね？」

やはり気付かれていたのだ、と麗華はごくりと唾を吞んで頷いた。

何を言われるのか、予想もつかなかったのだ。

すると桜井は「You did pretty well」と流暢な英語で呟いた。

イギリス帰りの麗華でも美しいと思えるブリティッシュイングリッシュだ。

「私の意図に気付いた学生は君一人だけだよ」

パツと顔を上げた麗華に、桜井は微笑みを向けた。

そのきれいな微笑に、けれど麗華はぎゅっと眉根を寄せて言った。

「……意図に、気付いたわけではないんです。私は、偶然、思い付きであの土地を見に行つて、そ

して資料との差に気が付いた。それだけです。桜井課長の意図など分かっていませんでした。ただのシミュレーション的な課題なのかなと思いましたが、折角実際の情報を得たのだから、そちらの条件でのアイデアも作ってみました——本当に、それだけなんです。なので、私も他のインターン生達となんら変わりはないんです」

なぜこんな言い訳めいた発言をしているのかと自分でもおかしくなったが、この時の麗華は必死だった。

他のインターン生らが一生懸命アイデアを練っていたのを見ていたし、自分が気付けたのは単なる偶然だ。

それなのに、他の学生は落胆され、自分が褒められるという状況に、罪悪感を抱いてしまったのだ。

黙って麗華の言葉を聞いていた桜井は、不思議そうに目を丸くして顎に手を置く。

「私は意図に気付くことを目的としてこの課題を出したわけじゃない。君を褒めたのは、アイデアを練るために実際に土地を見に行ったという好奇心と行動力についてだ。他者からの評価に対し謙遜するのは社会人として悪いことではないけれど、行き過ぎれば卑屈にも見えるから気を付けた方がいいかもしれないな。自己評価は高過ぎても低過ぎても、いい仕事には繋がらない。覚えておくといいよ」

桜井の助言には、怒気や嫌悪などの負の感情は一切見られなかった。

「——あ、ありがとうございます」

「うん。きっと、君はいい仕事ができる人になる。真面目さ、謙虚さ、そして適度な好奇心と行動力。まだアンバランスだけど、一緒に仕事ができたら面白そうだな」

それは社会という海に恐る恐る足を浸けた麗華にとって、至上の褒め言葉だった。ぶわっ、と身体中の血が熱くなるのを感じた。

この頃の麗華にとつて、桜井は得体の知れない大人だった。

柔和な笑顔を崩さないその下には、計算されつくした狡猾さを隠している。凄いと思う反面、怖いと思ってしまう自分もいた。

社会人になったら、そんな人達を相手にやって行かねばならないのかと、気が重くなっていたのだ。

けれど、その桜井が、自分と仕事をしてみたいと言ってくれた。

もしかしたら自分も彼らの中に入れるのではないか、そんな希望が湧いてきたのだ。

「じゃあ、これ、返すよ」

顔を真っ赤にする麗華の手に、桜井はパサリとレジユメを置いた。

「頑張つてね、藤井、麗華さん」

レジユメの上に書かれた名をなぞるように呼んで、桜井はボンとショートカットの麗華の頭に手を置く。

大きな手は骨張っていて、温かかった。

その日から、桜井辰郎は麗華の目標となったのだ。

大学を卒業後、麗華は桜井のいる三楽不動産に就職を決めた。

あれ以来桜井と共に仕事をすることを目標に頑張ってきた。

学業は勿論、部活動にも力を入れ、そして一年間の猛勉強の末、宅地建物取引士の資格も取ったのだ。

そうして麗華はかなりの倍率にもかかわらず見事採用されたのだが、配属されたのは営業部。

総合職の新人の多くは営業部に回されるため、半ば予想はしていたものの、ガツカリしてしまっただけだ。

なぜなら、桜井は総務部だったからだ。

——一緒に働きたかつただけだな。

そう嘆いたのは一瞬で、同じ会社に籍を置いただけでも、今は十分だと気合を入れ直す。

だが、その嘆きはすぐに吹き飛んでしまった。

入社後オリエンテーションで営業部課長として紹介されたのは、桜井辰郎その人だったからだ。

「おや、インターンの時の」

麗華を見つけると、桜井は微笑んでそう言った。

「藤井麗華さん。採用されたんだね、おめでとう」

名前まで覚えていてくれたことに感無量となり、麗華はガバリと九十度に腰を折った。

「はい！ まだ右も左も分からない若輩者ですが、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願いします！」

「はは、そんなに固くならないで。これから一緒に仕事をしていく同志なんだから、もう少しだけましよう」

「も、もったいないお言葉です……！」

「ははは、本当に相変わらずだなあ、藤井さん。まあ、そういう面も、おいおい、だねえ。これからどうぞよろしくね」

「は、はいっ」

憧れの人を前にガチガチになったままの麗華の様子に、桜井はクスクスと笑い、手を差し出した。その大きな手に慌てて自分の手を重ねれば、ついにこの人の傍で働くことができるのだという実感が湧き起り、麗華は胸が熱くなった。

こんな風に夢のような高揚感に包まれて、麗華は社会人としての一步を踏み出した——が、その後は散々だった。

新しく覚えなくてはならない事柄が多過ぎて、睡眠時間を削って頭に叩き込んだ。

そして連日の外回りで疲れた身体を労わる間もなく、書類作成のために残業をする。合気道で培った体力は、男所帯の営業部で男性と同様に働くにはいささか足りなかったようだ。

男所帯の営業部に入った女性新入社員は僅か三人。

その内の一人は、あまりの過酷さに入社後ひと月で辞めてしまった。

だが残ったもう一人の女性新入社員である伊田は違った。女性であることを理由に様々な点で仕事を免れていたのだ。

伊田は茶色く染めた長い髪を巻き、抜かりのないメイクをして、柔らかな色合いのスカートストーツを身に着けていた。

小柄で華奢で、力仕事などしようものなら潰れてしまいそうだったため、男性のみならず麗華も代わってやっていたくらいだ。

しかしその彼女から、提出しなくてはならない資料の作成を手伝ってほしいと頼まれた時に、麗華は断ってしまった。自分の仕事で手一杯だったのだ。

だが伊田は麗華が断ると、見る見る目に涙を溜めた。

「酷い。少し手伝って言ってただけなのに」

「えっ」

麗華は思わず目をパチクリとさせてしまった。

「ごめんなさい。自分の仕事で手一杯で、手伝う余裕はない」と言っただけだ。その言い方も、決して強い物言いではないので、そんな酷いことは言っていない。

麗華が呆気にとられている間にも、ポロポロと大粒の涙を流し身を震わせる伊田に、周囲の男性社員達が驚いて近寄ってきた。

「おいおい、何泣かしてんだよ、藤井」

「え、こや……」

「お前、伊田ちゃんが可愛いからつてキツイこと言ったんじゃないやねえの？ 伊田ちゃんはお前と違って繊細な女の子なんだから、ちよつと考えてやれよ」

「な……」

なんだそれは。暴言にもほどがある。

あまりの発言に、こんなマンガみたいなアホな台詞を吐く人が本当にいるんだ、と半ば感心すらしてしまった。

すると伊田はいつの間に取り出したのか、きれいなパールピンクのハンカチで目元を拭いながら、首を小刻みに振って言う。

「いえ、私が悪いんです。藤井さんもお忙しいのに、手伝ってなんて言ったから……ごめんなさい、藤井さん」

——えっと、そうですね、その通りですよ。私は何も悪くないですし……

そう思いながらも、だったらなぜ泣き出す前にその考えに至らなかったのかとツツコミたくなるのは、自分の心が狭いからだろうか。

釈然としないながらも、「いやいや、私の方こそ」などという社交辞令を述べるべく口を開いた瞬間、低い柔らかな声が遮った。

「そうだねえ。藤井さんも君と同じ新人で、同じ業務を抱えているんだし、人の手伝いをする余裕がないのは当たり前だろうからね。まして、彼女には私が新たな仕事を任せるところだしなあ」

麗華の机を囲んでいた数人の人ばかりは、一斉に声の方向に顔を向けた。

そこには少し離れた場所で腕を組み、観察でもするようにこちらを眺める桜井の姿があった。

「さ、桜井課長……そんな、あの、他の仕事があるならそう言ってくれば……」

涙目の伊田は、縋るように甘い声で桜井の名を呼び、もによもによと呟く。

——えっと、私、自分の仕事で手一杯だって言いましたよね？

と、またもやツツコミたくなったが、ここで何か言うのもまた角が立つだろうとグツと堪える。

そんな伊田に、桜井は微笑を浮かべたまま小首を傾げた。

「ちなみに、君が手伝ってもらおうとしているその書類、藤井さんは数日前にすでに仕上げて提出している。だから次の仕事を頼んだのだが……君はまだできていないようだね」

「あ、あの、でもこれ、期限は今日だって……」

しどろもどろになりながら弁明しようと伊田が口を開けば、桜井は穏やかな口調のまま続けた。

「そうだね、今日提出してくれば問題ない。私が言いたいのは、藤井さんと君の間では、仕事量の差があるという事実だ。彼女は確実に君よりも仕事量が多い。……ああ、君の仕事に問題があると言っているわけではないよ。仕事は量もさることながら、質の高さも重要だからね。だが、今はそこが論点ではない。君よりも多くの仕事をこなしている藤井さんが、君の仕事を手伝う余裕がないのは当然のことであり、藤井さんが責められる理由は皆無だということだ。君が言いたかったのはそういうことでしょうか？」

にっこり、と一点の曇りもない笑顔でそう問いかけられ、伊田はコクコクと首を上下に振った——振るしかなかった。

その目にはもう涙の欠片かけらもなく、口許くちもとが微妙に引き攣つっている。そう見えたのは、きつと自分の気のせいではないだろう。

「さあ、当事者がこう言っているんだし、そもそも部外者が出る幕など端はなからない。大体、君達にこんなところで油を売っている暇はあるのかな？」

桜井がパン、と手を叩いて言えば、男性社員達は蜘蛛くもの子を散らすようにして逃げて行った。「さて、君達も頑張つて」

桜井は残された女性社員二人にもそう言い置くと、軽く手を上げて自分のデスクへと戻って行った。

麗華は、やれやれ、と長い息を吐いて椅子に座り肩を下げる。すると、ギリ、と齒軋はぎしりのような小さな音が聞こえてきて目を瞬またたかせた。

その直後、低くドスの利いた囁ささやき声が降ってきた。

「調子乗らないでよ、ブスが」

えっ、と驚いて思わず顔を上げれば、こちらを憎々しげに睨にらみ下ろす般若はんにゃのような伊田の顔があった。

驚愕に目を見開いたまま固まった麗華に、フンツと大きな鼻息を吐き出して彼女は去って行った。その小柄な後ろ姿を茫然と眺めながら、麗華はするすると椅子の背を滑った。

——こ、こわっ……！！

あんな女性の顔を、麗華は知っていた。

あれは敵とみなした同性に見せる女性特有のマウンティングサインだ。

自分の周囲で女子達がそういう顔で互いを牽制し合っているのを見てきたのだから。けれど麗華自身にそれを向けられたことはなかった。

なぜなら、女子校において麗華は『男性役』のポジションだったからだ。

だが、男性が多いこの会社では、麗華は『女性』に他ならない。

——つまり、私は彼女達にとって『敵』になりうるのね……

改めて気付かされた現実に愕然がまんとするが、今はとにかく目の前にある仕事を片付けなくてはならない。

自分で決めたノルマを終わらせるために気持ちを切り替えようと、飲み物を買に行くことにした。

エレベーターに乗り扉を閉めかけたところで、誰かの手が見えた。

慌てて開閉ボタンを押せば、がっしりとした長身がスルリと入り込んでくる。

「あ、課長……！！」

「ごめんね。入れてくれてありがとう」

エレベーターに乗り込んできたのは、桜井だった。

桜井を前にすると、麗華はいつも顔が真っ赤になってしまう。

憧れの人だから仕方ないのかもしれないが、恥ずかしさは拭ぬぐえず、それでまた顔が赤くなるという悪循環ぶりだ。

「ああ、藤井さんも自販機？ 私もなんだ。喉が渇いてね」

麗華の押ししていた階数ボタンを見て桜井が気さくに話しかけてくる。

赤面していることに触れてはこない。そのことに安堵を覚え、麗華は落ち着きを取り戻した。

「あの、先程はありがとうございます」

桜井が助けてくれなければ、あの場で麗華は吊るし上げ同然に責められていたかもしれない。

改めて思い返しブルリと身を震わせれば、桜井が溜息を吐いた。

「いや。女性が少ない職場っていうのも困ったもんだなと、さっきのを見ていて思ったよ」

「え？」

「少ない異性に気に入られようとするのは、まあ自然の摂理なのかもしれないけどね」

「ああ……」

肩を竦めて話す桜井に、麗華は苦笑を漏らした。

つまり、先程麗華を取り囲んだ男性社員達は、伊田に気に入られたいのために麗華を吊るし上げ

ようとしたことだろう。

「伊田さんは私から見てもとても可愛らしい方ですし、仕方ないですよ」

自分を卑下する言葉にならないよう注意する麗華に、桜井は形の良い眉を顰めた。

「あなただって可愛らしいよ、藤井さん」

一瞬何を言われているのか理解できず、麗華は苦笑のまま数秒固まってしまった。

「……………うええっ!？」

動揺のあまり妙な声が出た。やっと治まったはずの頬の紅潮が、また一気にぶり返したのを感じる。

焦って涙目にすらなっている麗華を、桜井は不思議そうに眺める。

「あなたはどうも自己評価が低いよね。そんなにきれいなのに、なぜなんだろう」

「きっ!？」

——何を言っちゃってるんでしよう、桜井課長！

パニクる麗華とは裏腹に、桜井はさり気なく麗華の顎を摘まむと、くい、と上向させた。

麗華は目の前に桜井の整った顔が迫って来てギョツとする。

「や、さささ……」

さくらいかちよう、という次に続く音は、桜井の「ふむ」という頷きに行き場を失った。

「やっぱりきれいだ。美しいパーツがあるべき場所に収まっている。それなのにどうして自分の美しさの出し惜しみをしているの？」

その平坦な声色に、桜井が自分の顔を観察しているだけなのだと気付く。自分の狼狽が滑稽に思えて、麗華は慌てて姿勢を正した。

「あの、美しいかどうかはなんとも言えませんが、出し惜しみ、という言葉にはなんとなく心当たりがあるというか……」

「ふむっ」

麗華の曖昧な返答に、桜井は興味深そうに先を促した。

「えつと……私は幼稚舎からずっと女子校育ちだったんです。課長をご存知かは分かりませんが、女子校の中だと、背が高かったり、ボーイッシュだったりする女子は……なんというか、周囲からまるで男子のように扱われるんです」

「ああ……なるほど。あなたはずっと『男役』だったということか」

女子校のそういう事情が男性に上手く伝わるか心配だったが、桜井はアッサリと理解したようだった。かの有名な女性だけの歌劇団をイメージしたのかも知れない。

「そうです。なので、女性らしく振る舞おうにも、その仕方が分からないというか……」

あはは、と後ろ頭に手をやって笑って見せれば、桜井が未だに親指で麗華の顎を撫でながら思案顔になる。

「ふうん……でもそうだとしたら、さっきの伊田さんのような女性からの敵意に、戸惑ったんじゃない？」

「えっ……そ、それは……」

桜井が、伊田の麗華への敵意を見抜いていたことに驚きながらも、何と答えていいものか迷う。言いあぐねていると、桜井がクスリと笑った。

「これまで男役だったのなら、女性から向けられる敵意の的にはならなかったはずだ。驚いたでしょう？」

麗華の状況を正確に把握しているだけでなく、心情を丸ごと読み取ったかのような発言に、嘩然としてしまった。

「あなたは女子校という特殊な環境下で男役になったことで、女性からは賞賛を受けてきたんだろうね。だが男性がいる『社会』に入った以上、あなたは『女性』に戻ることになる。これからは女性として同性の、あるいは異性の敵意と賞賛の対象となるわけだ」

そこで一旦言葉を切ると、桜井はようやく麗華の顎から手を離れた。

大きな手の少し骨張った感触が離れていくことに、なんだか淋しさを感じてしまう。そんな自分にビクビクしながら、麗華は桜井の一举一動を見つめていた。

「同性と異性の思惑が交錯する中を生きるには、あなたは少し無防備過ぎる」

「む、無防備、ですか……」

「武器を身に着けなさい、藤井さん」

艶のある低い声で落とされた穏やかな命令は、まるで敵かな天啓のように聴こえた。

桜井は微笑を浮かべていた。

「資格や取得言語、それにコミュニケーション能力なんかも武器と言えるよね。あとは、人柄なども。そしてもうひとつ。外見だ。人の印象は第一印象で八割決定する。あなたのその美しさは、磨けば大きな武器になる。原石のまま放置しておくのは惜しいよ。武器にするべきだ」

やんわりと諭すような言葉は、揺るがない重みをもって麗華の腹に落ちる。

「美しさ……」

ふと麗華は、自分が初めて中等部の制服であるセーラー服を着た時のことを思い出していた。

紺色に白のラインの入ったセーラーカラー。

幼稚園の時はもったりとしたブレザーだったから、セーラー服がとても可愛らしく見えた。

中学生になったらあれを着られるんだと、ワクワクしていたのを覚えている。

だが実際に着てみた時、鏡に映る自分の姿に愕然がくぜんとしてしまった。

男の子のようなショートカットに、真っ黒に日焼けした凛々りんりんしい顔。

少年が間違つてセーラー服を着てしまった、そんな姿だった。

——私は、女の子らしくない。可愛くないんだ。

自分の中に芽生えたその認識は、麗華の中心にぐざりと刺さった。

少女だった麗華は、まだ可愛らしさ、か弱さなどの女の子らしさへの憧れを持っていて、そのカテゴリから逸脱いつだつした自分に、大きなショックを受けたのだ。

とはいえ、元来あまり悲観的な性格ではなかったため、そのショックをポジティブな方向へ変換した。

『男の子っぽい』を転じて、『カッコイイ』へと。

——女の子らしくなくても、カッコ良ければ、別にいいじゃない。

そうして、立ち振る舞いまでもを少年っぽくするようになったのは、この頃からだった。

だが、社会人になればそうもいかない。男にもなり切れず、女であることを強みにもできない麗華は、確かに生きづらい性質だと言えるだろう。

その事実には薄々気付きながらも、これまで見て見ぬふりをしてきたことを、麗華は認識したのだ。そしてそれを指摘してくれた桜井に、崇拜にも近い感情が湧いて出た。

だって、言いづらい内容だ。

下手をすれば麗華のユニセックスさを非難したと捉えられかねない。

あるいは、セクハラだと言われる可能性もあるのに、それを押して桜井は麗華に忠告してくれた。

——桜井課長は、私が変われると、信じてくれているんだ。

武器を身に着ける、と桜井は言った。そして麗華の中にその武器はあるんだとも。

——だったら、やってみせる。

やってやるうじやないか。

武器を磨いて、強したたかに、しなやかに生きるために。

麗華は顔を上げた。

桜井がいつもの穏やかな表情で、真っ直ぐに麗華を見つめている。

「やりませぬ、桜井課長。武器になるようなものが私の中にあるのなら、武器にしてみせます」

——あなたのようにになりたい、桜井さん。

桜井のように、穏やかで、揺るがず、けれど柔軟に、しなやかな、大きな人間に。

これまでもそう思ってきたのだが、この日、それに明確な色が付いたのだ。

桜井のようになりたい。

桜井に近付きたい。

彼の隣に立てるようにになりたい。

その願いは、紺碧こんぺきの真夏の夜空に咲く三尺玉の花火のように、一発で麗華の心の中を染め変えて

しまった。

決意を込めた麗華の眼差しに、桜井は何を見たのか。

クスリ、と息を吐き出すように笑って、桜井は無言のまま麗華の頭に手をやった。

ぼん、ぼん。

小さな子をあやすみたく、大きな掌てのひらが頭のとっぺんで弾む。

大きく、温かい手。

——インターン生の時も、この手を追いかけたんだった。

この人と働きたい、そう思って、この会社に入るために頑張った。

そして今は、この人の隣に立ちたいと願った。そしてまたこの手を追いかけるんだろう。

——私はずっと追いかけるのかもしれない。

そう思った時、自覚した。

——ああ、恋に落ちてしまった。

藤井麗華、この時二十三歳。

人よりも少しばかり遅咲きの、初恋だった。

3

あれから五年経った今も、麗華は桜井からの教えを守り続けている。麗華は、営業部にてビシバシと扱しごとかれ、今や女性初の主任という地位にまで上り詰めた。

そんな三楽不動産営業部の女神こと、藤井麗華の朝は早い。

ワンルームマンションにある住人専用のフィットネスルームで、朝五時からの一時間、軽く汗を流すのが麗華の日課だ。

シャワーを浴びメイクを施ほどこし、新聞を片手に熱いコーヒーと、数種類の果物とグラノーラにヨーグルトをかけた朝食を摂ったら出勤する。

靴には、履く前に傷がないかを確認してから足を入れる。

身だしなみは足元から、と教えてくれたのは憧れのあのんだ。

以来忠実にその教えを守り続けている。

きっかり八センチの黒いパンプスは、自分の脚を美しく見せ、かつ動きに支障が出ない、お気に入りのブランドのものだ。

玄関を出る前に、姿見の前で自分を確認する。

肩までの艶やかな黒髪は、女性らしく緩やかに、けれど清潔感を第一に結い上げられている。

ナチュラルに見えるけれど、しっかりと施された化粧。毎日の食生活に気を付けているおかげで、吹き出物が出なくなつた肌はきめ細かく滑らかだ。メイク乗りも良い。

程よくフィット感のある女性らしいフォルムのパンツスーツは、上品に見えるモーヴグレイド、最近のお気に入りだ。

「よし！」

鏡の中の自分にそう頷くと、麗華は玄関のドアを開いた。

麗華は自分のデスクに着くなり、背後の席の後輩に声をかけた。

「水戸くん、港区のタワマンのペントハウスの件どうなった？」

自分も余裕を持って出社する方だが、この後輩はいつもそれ以上に早い。

彼は、麗華が教育係を担当した去年の新卒だ。

要領はまだあまり良くはないが、営業には珍しく柔らかな物腰と丁寧な仕事ぶりから、先が楽しみな若者だった。

しかも唐突に大きな仕事を取ってくるタイプで、それ故『ラッキーボーイ』などと周囲から言われていたりする。だが水戸が誰よりも努力家であることは、教育担当だった麗華が一番よく分かっていた。

その証拠に、朝一から振った質問にも、打てば響くように回答が返って来る。

「はい！ 昨日先方からこちらの話を聞きたいとリプライがありました。空いている予定を訊いてありますので、本日中に折り返します」

澁刺とした顔で麗華の指示を待つ後輩を見て、麗華は笑いを噛み殺す。彼の顔が、尻尾を振って「マテー」をする仔犬のそれに見えてしまったからだ。

だがここで笑ってしまつては彼が可哀想だ。

麗華はにっこりと微笑むに留めて、満足気に頷いた。

「そう。じゃあ早々に決めてお電話しなくちゃ。陳様は今どこに？」

「今日はドバイということでした。近々では来週の月曜日から来日するそうなので、それに合わせてもいいと自分は考えていました」

如才ない返答に、麗華はにっこりと微笑んだ。

「そうね。では来週の月曜日に予定を合わせましょう。水戸くん、電話での陳様との会話は英語で？」

「あ、はい。陳様はすごく堪能なので」

「そう。でも今回は契約が決まるかどうかの重要な機会になると思うから、上海語を少し勉強してらって」

「じゃ、上海語、ですか……」

「あなた、中国語は大体できるんでしょう？ そしたら大丈夫よ。標準語と東北弁くらいの差しか

ないから。日常会話程度でいいの。相手の心証を良くするお守りみたいなものよ」

陳氏は、中規模な貿易業を営む典型的な新華僑だ。世界を股に掛けて商売をしている彼らは、自分達のルーツを大切にしている。

彼らの言語である上海語を使う機会があるとは限らないが、もしこれでコミュニケーションが取れたなら――役に立つかもしれない『お守り』をいくつか用意しておくのが、麗華の験担ぎだ。

だがそれを後輩に教えるつもりはない。彼は彼で、自分なりの験担ぎを作っていくべきだと思っている。

麗華の若干あやふやな説明に、それでも後輩は「分かりました」としつかり頷いた。その様子を見て麗華の顔に笑みが零れた。彼のこういつた素直さに、ポテンシャルを感じている。

「じゃあ、月曜日にアポイントを取っておいてね。私も同行します。時間は先方に合わせて」

「了解です！」

パツと顔を輝かせて元気よく返事をした後輩の掌に、麗華はボンとチョコレートバーを置いた。ポカンとする彼に、麗華は軽く肩を上げてみせる。

「とりあえず、のご褒美。この契約が上手く行ったら、ちゃんとしたご褒美をあげるから、今はそれで我慢してね」

少々お高い焼肉屋にでも行きましょう、と続けようとした麗華は、後輩の顔が真っ赤に染まっていくのを見て目を瞬かせた。

「藤井主任の……ご褒美……！」

「……水戸くん……?」

どこか恍惚と呟く姿に首を傾げていると、いきなりボン、と肩を叩かれて仰天した。

麗華の肩を簡単に覆ってしまうほど大きな骨張った手。ふわりと鼻腔を擦るのは、僅かにムスクが混じるグリーンノート。

麗華が敬愛してやまない彼の香水の匂いだ。

「藤井くんに出させるまでもない。水戸くん、この契約が決まれば、私にご褒美をあげますよ。それこそ寿司でも焼肉でも、ね」

いつの間にか麗華達のすぐ傍に立っていたらしく、柔らかな笑みを浮かべた桜井がするりと会話に入ってきた。

「ひいっ」という情けない悲鳴は、水戸から聞こえたものだ。桜井の顔を見て、顔色が薄紅から蒼白へ急変している。

「さ、桜井部長！」

水戸の声に、麗華の背筋がピツと伸びた。

桜井、という名前を聞いただけで、心臓が猛スピードで拍動し始める。

「さ、さ、さくらい、部長……！」

麗華はと言えば、恋をしている憧れの人の唐突な介入に、狼狽のあまりどもってしまった。全身の血が沸騰するように熱くなり、顔にまでその熱が伝わっていく。

——ああ、また、顔が真っ赤になっちゃってるわ……

頬が熱いのが分かる。

きっと他の者が見ても丸分かりだろう今のこの自分の赤面に、恥ずかしさが込み上げてきた。だからといって今更どうなるものでもない。

急に顔を赤らめた自分が、周囲に呆れられてやしないかとチラリと窺うも、同期や後輩達に特に驚いた様子はない。

気付かれていないことにホッと胸を撫で下ろしていると、水戸がなんだか妙に温かい笑顔でこちらを見ていた。なんだろう。

「おはよう、藤井さん、水戸くん。朝早くから熱心だね」

対する桜井の方は微笑んで挨拶をくれる。穏やかな美形紳士は今日も通常運行である。

「あ、ありがとうございます！」

水戸が直立不動で礼を返す。放っておいたら敬礼までしそうな雰囲気だ。

水戸は桜井が苦手だったろうか、などと内心で自問していると、桜井が「時に藤井さん」と話を振ってきた。

慌てて振り仰げば、思ったよりも近くに桜井の端整な顔があって息を呑んだ。

そう言えば、あまりに自然な所作で不思議にも感じなかったが、肩を叩かれた後もずっと、桜井の手は麗華のそこに置かれたままだ。

朝っぱらからの恋しい人との近過ぎる距離に、嬉しいのか苦しいのか分からない。

「は、は……」

緊張のあまり、語尾が小さくなってしまった。

「実は来月からウチに異動になる者がいるんだが……」

「あ、は、はい！ 山口さんの代わりですね！」

山口は中途でこの会社に入った三十八歳の女性だ。

超有名国立大学を卒業後、某化粧品会社の研究職に就いたものの、肌に合わず一年で退職。その後証券会社で営業をしていたところを、三楽にヘッドハンティングされたという異色の経歴を持つパワフルなバリキャリである。

その山口女史が、数か月前に電撃結婚をして、部内一同をびっくりさせたのだ。

しかも授かり婚で、相手は一回りも年下だというから驚きを通り越して賞賛するしかない。

幸せいっぱいなのは彼女は、大事を取って来月から早めの産休に入る。

だから人事がその代わりの人間を回してくれたのだろう。そう見当をつけて頷くと、桜井は少し困った表情になる。

「実は、経理部からの異動で、しかも入社二年目の若い女性なんだ」

「え……」

それは困りましたね、という声を麗華はすんでのところで呑み込んだ。

産休に入る山口は、麗華と肩を並べる実力の持ち主だ。

その代理が営業経験のない、しかも二年目の女子となると、その仕事量の差は考えるまでもない。そのカバーをしなくてはならないのは、当然ながらこの部署の人間である。そう考えて、思い出

したのは、同期だった伊田だ。

あの一件後も麗華への敵意は変わることなく、何かにつけて絡むような言動を取られ、ずいぶん
と悩まされた。

それだけではなく、伊田は仕事に対して真摯しんしではないところがあった。

彼女がやり損ねたりへマをしたりする度、部署の人間がカバーしなくてはならず、部署内が殺伐さつぱく
とした雰囲気になったのだ。

それまで伊田に対し甘い顔をしていた男衆おとこしやうも、徐々に冷たくなっていったのは言うまでもない。
四面楚歌しめんそかとなりかけた後、彼女はすぐに逃げないようにして他部署の男性と結婚し、寿退社じゆたいしゃをし
ていったのだ。

新しい女性社員はそんな人ではないだろうが、仕事に慣れないままだと周囲がきつくなる。また
あの時のようなことになるかもしれないと思うと、正直憂鬱ゆううつになる。

麗華の言いたいことは伝わってしまつたらしい。

桜井も形の良い眉を下げ苦笑の面持ちだ。

「君が何を想像したか分かるよ」

「は……す、すみません」

「いや、私も危惧しているところではあるんだ。ウチは男所帯だし、きつと女性にとつてはいろ
んな意味でやりづらいことが多々あると思う。OJT指導者は佐野さのさんに頼もうと考えているん
だが」

「佐野くんですか」

なるほど、と麗華は頷いた。

佐野は麗華の一年後輩で、この営業部の中では物腰の柔らかい部類だ。実務を通じて教育するO
JT指導者にうってつけだろう。

「良いと思います。仕事は細やかですし、優しいから指導も威圧感なくできるんじゃないか
と。……ただ……」

そこで言葉を濁にごした麗華に、桜井がクスリとまた苦笑を漏らす。

「ちよつとチャラい？」

「……えっと」

紳士桜井のものとは思えないスラングに、麗華は思わず彼を凝視してしまつた。

びっくりまなこの麗華に、桜井は愉快そうに笑いながらクツクツと喉を鳴らした。

「佐野くんは女の子が大好きだから……違う？」

「いえ……違います」

麗華が言いたかったのはまさにその点だ。

佐野は優しそうな外見と物腰を利用して、しつかり仕事を勝ち取つて来る肉食獣だった。

彼の顧客には、細やかでマメなアプローチに陥落かんらくした資産家のマダムが多い。

女好きでも有名で、可愛いと思われる女性には片っ端から声をかけるイタリア男のような一面が
あるのだ。

つまり、端的に言えば、チャライ。

今度入って来るといふ女性社員が彼の餌食にならなければいいのだが……という憂慮が、麗華にはあつた。

「私もそう思つただけだね、実際にその新人さんに会つてみて気が変わった」

「部長、お会いされたんですか？」

少々意外な気がして目を丸くすれば、桜井は小さく肩を竦めた。

「いや、偶然なんだけどね。まだ異動が決まる前に、一度会つたことがあるんだ。少々危なっかしい感じはあるけど、なんとなく、ウチに新しい風を入れてくれる気がしてね」

「新しい風、ですか……」

桜井の言葉を鸚鵡返しにする麗華の胸に、もやっとしたものが生じた。

異動になつてくる女性を思い出しているのか、桜井の表情が楽しげに見えたからだろうか。

麗華にはこれが嫉妬だと分かつている。

桜井に恋をしてから、これまでに何度もそういう想いをしてきたからだ。

桜井はモテる。この容姿に、このハイスベック。加えて性格も紳士で未婚とくれば、モテないはずがなく、取引先や顧客など、桜井にアプローチをかける女性は後を絶たない。

紳士である桜井はそういった女性達にも、とても丁寧に接する。

それが桜井という人間だと分かつているのに、それでも麗華の中の恋心が、それを嫌だと醜く喚くのだ。

——こんな醜い感情、知られたくない。

桜井は麗華を頼りにしてくれている。まだまだ男性優位のこの会社で、女性である麗華を主任という地位に推してくれたのは、他でもない桜井だと聞いている。

『君と仕事ができたら面白そうだな』

そう言つてくれた桜井の期待に応えられるよう精一杯やってきた。そんな自分の努力が、この醜い感情ひとつであつたという間に穢される気がしてしまう。

だから麗華はお腹に力を入れて、殊更につこりと微笑んでみせる。

「部長がそう仰るなら、私もその新人さんにお会いするのがとても楽しみです」

パーフェクト、と麗華は心の中で自讃した。完璧な笑みに、完璧な受け答え。これまで培つてきた『藤井麗華』ならば、こう微笑んでそう言うに決まっている。

だが桜井は、麗華の完璧な微笑を前に、少しだけ眉を下げた。

「うん」

その相槌は何を意味しているのか。桜井にしては曖昧な受け答えで、麗華は内心戸惑つた。

桜井の表情が、どうしてか淋しげに見えたのだ。

どうかしたのですか、と問うのもどうかと思われて躊躇していると、桜井が言葉を続けた。

「あなたならそう言ってくれると思つていたよ。教育係、それでもやはり先達である女性社員が傍にいる方が心強いだろうと思う。OJT指導者に佐野君とあなたの名も挙げたいんだが、いいかな？」

この会社で一人の新人にOJT指導者が複数つくことはほとんどない。

——それだけ、桜井部長がその人に目をかけているってこと……？

「またもやむくりと頭をもたげそうな嫉妬を、麗華はぐっと抑え込む。」

——私にできるのは、桜井部長の期待を裏切らないことだけ。

「そう自分に言い聞かせ、麗華はしっかりと頷いた。」

「勿論です。私でお役に立てるなら、喜んで！」

輝かんばかりの女神の微笑みでそう請け負えば、桜井が少し眩しそうに目を細めた。

「ありがとう。あなたにやらせられる」

溜息のように落とされた桜井の言葉に、麗華の心が歓喜に震えた。

——あなたのその一言で、きっと私は空も飛べてしまう。

胸の中で呟いた独白に、自分のどうしようもない恋心を再認識して、麗華はこっそりと自嘲した。

陳氏との電話での打ち合わせ後、麗華は契約がまとまりそうな他の顧客に会うために社外へ出た。その帰社の道すがら、東京駅周辺で腕時計を見て足を止めた。

左の首首に巻かれたオメガのレディマティックの針は、十八時近くを指している。

おそらくこのままいけば会社に戻るまでに終業時間を越える。今日中にしなくてはならない仕事

もないため、無理に帰社せず電話をして直帰にしてもいいかもしれない。

そんなことを考えたのは、きつと朝の桜井との会話のせいだろう。

来月から異動になるという女性——確か中林なかばやしと言ったか。彼女の話を話す桜井の柔らかい表情を思い出すと、胸がツキンと痛んだ。

桜井は彼女を好きなのだろうか。いつもは、あんな優しい顔を女性に対して見せたことがない人だ。

それなのに——ぐるぐると巡りそうになる思考を、麗華は小さく首を振って止める。

「ばかな真似を、と自分に苦笑が漏れた。」

ただの妄想だ。自分が頭の中で作り上げたそれに惑わされて、ありもしないことに思い悩むなど、非生産的。ナンセンスもいところだ。

ふう、と息を吐いて顔を上げると、ビルの間隙に夜色を少しだけまとった空が見えた。

十月の夕暮れは、いつの間にか秋の気配が濃い。

——ちよつと、疲れてるのかも。

「思えばこのところ、契約がまとまりそうな案件が重なってバタバタしていた。」

「ありがたいことではあるのだが、少々疲労が溜まってきていたのかもしれない。」

「こういう時は、リフレッシュよね。何かおいしい物でも食べて帰ろうかな」

誰にともなく呟いた独り言に、艶やかなバリトンボイスが応えた。

「それは実にいいアイデアだ」